

小林多喜二伝補遺 7

倉 田 稔

もくじ

はじめに

- 1 家族など
- 2 多喜二周辺の人々
- 3 蔵原の場合
- 4 井上ひさし講演から
- 5 多喜二奪還
- 6 滝子との関係
- 7 その他
- 8 ブームと学会
- 9 文献など

はじめに

私は、『小林多喜二伝』（論創社 2003年）を出した。これは、小林多喜二生誕100年を記念したものである。また、彼の虐殺七〇年にもあたっていた。これは、世界で、日本で、最もくわしい、小林多喜二の伝記であった。

書評は始め二つ出たが、佐高信『『蟹工船』の作者を等身大でとらえる』として、佐高信『現代日本を読み解く200冊』（金曜日 2010年）が寄せられた。

本書出版後、私は次を書いた。

「小林多喜二伝 補3 および『小林多喜二』索引」(『商学討究』54の4, 2004年3月),

「小林多喜二伝 補遺(4)」(『商学討究』55の4。2005年3月),

「多喜二書き込み, および小林多喜二伝 補5」(『商学討究』56の4, 2006年3月),

「小林多喜二伝 補遺・新6」(『言語センター広報』17号。2009年1月)

「新しい「プロレタリア文学」」(『言語センター広報』19号。2011年1月)

「多喜二の小説「春ちゃんの場合」の場合」(『言語センター広報』21号, 2013年1月)

月刊『文藝春秋』(2013年2月号)に談話。

「小林多喜二の小樽時代および最近の研究」(『いま中国に よみがえる小林多喜二の文学』東銀座出版 2006年),

「小林多喜二の軌跡」(『われらのインター』16),

「オックスフォード大学での小林多喜二国際学会」(『大塚会会報』36),

「小林多喜二について若干の文献」(『小樽商科大学史紀要』創刊号),

『国文学』に二つ短文を出した。

「小林多喜二の幻の小説」(『らぶおたる』)

私的なことを書くと、この10年で、講演の類では、旭川九条の会、ポッセ、朝日カルチャー札幌、釧路で二回、商大シニア・カレッジ、JR組合、小樽革新懇、小樽民文、山宣会などで、多喜二を紹介してきた。ある時は、佐高信さんとのミニトークも行なった。「高商図書館と多喜二」の題で、商大サテライト(小樽)で講演したことがある。

1 家族など

多喜二の父・末松にはその兄・慶義と、姉が3人いたらしい。長姉?は19才で1865年に亡くなった。

祖父・多吉郎の先妻は田山ユキで、慶義の実母であり、1874年に亡くなる。

慶義は浅利リツと1877年に結婚した。祖父・多吉郎は斉藤ツネと1878年に再婚した。

伯父・慶義の長男幸蔵は1880年に生まれた。多喜二のいとこである。

1886年に、父・末松が木村セキ（13才）と結婚した。

慶義は初め敬吉という名だった。慶義の次男・俊二が1887年に生まれた。

1890年、セキは第一子を死産した。1893年、慶義一家は小樽へ行く。

1895年、祖父・多吉郎が亡くなる。

1895年、セキが長男・多喜郎を生む、多喜二の兄である。

1896年、安倍也既知校長が、沢口小学校から川口小学校へ転任し、末松家の家を借りる。

1899年、セキが長女ヤへを出産し、早世する。

1900年、セキが二女チマを生む。

1901年、小樽の幸蔵はパン屋（石原）に奉公？する。この年、慶義の四男・太郎が生まれる。

1902年、慶義は、稲穂町のパン屋を譲り受けた。

1903年、多喜二が生まれる。誕生日は12月1日である。10月13日ではなく。

1904年、小樽大火で、稲穂町が焼け出された。すぐパン製造を潮見台町で再開する。そして新富町（龍徳寺の向かい）に新しい工場・小林三星堂を作る。

1904年、秋田の慶祖母・ツネが死亡する。

1905年 慶義の長女ハルが生まれる。

1906年、セキが三男末治を生む。この人についてはほとんど言及がなく、不思議である。

1906年 安倍弥吉校長が東京の病院で死去する。

1907年1月4日、妹ツギが生まれる。兄・多喜郎が5月、小樽へ行く。10月、病死する。多喜二一家、小樽に移住する。つまり、父・末松、母・セキ、姉・チマ、妹・ツギ、そして弟・末治も一緒だったか。

1909年、伯父・慶義、拠点を苫小牧にも持つ。

1909年、弟・三吾、生まれる。

1912年、慶義が次男・俊二を苫小牧に呼び寄せる。

1913年、セキ、五男・多喜志を出産するが、早世する。この名を使って、多喜二は後に文章を書く。

1913年、姉・チマ、小樽高女に入学する。

1915年 慶義の四男・太郎が小樽水産学校に入学する。

1916年、妹ユキ生まれる。

1922年、姉・チマ、佐藤藤吉と結婚する。

1923年、多喜二は徴兵検査を受けたはず。

1924年、多喜二、拓銀に就職。父・末松、病死する。

1925年、多喜二、東京商大を受ける。12月、多喜二は、タキを身請けする。

1926年4月末、タキが多喜二宅へ同居する。11月11日、タキは家を出る。したがって同居していたのは半年である。

1927年5月28日、タキ、小樽から失踪する。

1928年、末治（末松、セキの三男）の婿養子縁組婚姻。この人のことは伝記ではほとんど触れられていない。3月10日、妹ツギ、幸田氏と結婚する。第一回普選。この時、多喜二は24才2ヶ月なので、選挙権を持っていない。候補者・山本懸蔵は供託金が必要で、2000円の資金集めをした。彼は、(1895-1939・3・10)、茨城県出身、ソ連で処刑された。(参考)加藤哲朗『モスクワで肅正された日本人』青木書店。伊藤千代子のお金で山県が北海道に来られた、とされる。

1929年5月14日 タキと多喜二、二年ぶりに会う。

1930年、多喜二は上京し、8月21日から31年1月22日まで、多喜二は豊摩刑務所に収監された。手紙を書くために、母セキは字を習った。

1931年、多喜二、滝に結婚を断られる。

1931年、慶義、死去。

1972（昭和47）年 ツギ死去。ツギには息子がいる。この人は多喜二によ

く似ていたという。

2 多喜二周辺の人々

三船留吉（補遺）

多喜二を売った男、当時の党・東京市委員長は、香川（本名 三船）といって、小柄で頭の下さそうな顔をしていた（寺尾とし『伝説の時代』、p.214）。最新流行の背広やスプリング・コートを着ていた。能弁でハツタリ屋だった。（p.215）当時、地下にもぐって活動している党員の写真は、普通の刑事はもちろん、一般警官にいたるまで全部に渡っていた。（p.209）ちなみに、宮下『特高の回想』によれば、勉強してきた人はスパイにしにくい、労働者あがりはスパイにしやすい、という。

松岡二十世（はたよ）

松岡将『松岡二十世とその時代』（日本経済評論社 2013年）が出版され、小林多喜二の同時代人、同じ場所にいた松岡が明らかにされた。

松岡二十世（はたよ）は、1901年、宮城県生まれ、父は、登米（とよま）藩の人、三男。中学4年で第二高（仙台）に入り、東京帝大法学部政治科へ進む。セツルメント運動に参加し、新人会に入る。マルクス主義を知る。大学院に進む。北海道往来は新人会時代からで、北海道の農民運動に加わる。多喜二の「転形期の人々」で、「東京からやってきた、ロイド眼鏡がよく似合うスッキリした顔立ちの「松山幡也」という、めずらしい名前の学生」と書かれる。松岡はエンゲルス「ドイツ農民戦争」を翻訳中で、「エンゲルスってなかなか才筆家だね」と言う。

大正末年、東京朝日新聞の入社試験で、東大の尾崎秀實、松岡二十世、慶応の野呂栄太郎の3人が残る。尾崎が入社した。二十世は札幌の北海タイムスに入った。しかし目的は新聞記者にはなく、四ヶ月で退社する。日本農民組合北海道連合会の書記となる。実務能力に優れ、謄写版技術にたけた。磯

野富良野小作争議，樺戸月形小作争議で，地主側に譲歩させる。3・15事件で逮捕され，懲役3年，網走刑務所へ行く。出所後，にわか百姓になる。

島木健作は「東旭川村にて」で彼を書く。松岡は上京して評論活動をする。「満州国協和会」で調査研究する。敗戦でソ連にらちされ，シベリアで死ぬ。

細川貞治郎

1893（明治26）年9月7日生まれ，1952（昭和27）年4月24日没。本籍は，南秋田郡北浦町（男鹿市）畠。北海道にわたり，小樽に住み，1925（大正14）年夏，小樽総労働組合に参加した。一時，樺太に出稼ぎに行った。1928（昭和3）年秋，小樽に戻る。1929（昭和4）年小樽労働同志会を結成し，同年，家賃値下げ運動のリーダーとなる。1932（昭和7）年，日本労働組合総評議会系の全小樽労働組合の委員長となる。戦後，労働運動に復帰した。

小沢三千雄編『秋田県社会運動の百年』（みしま書房 1978年）

上野武治「大月源二の絵「走る人」が現代に問いかけるもの」（『北星論集』（社）第51号）は，大月の絵「走る男」の主役を多喜二としたと，推定する。（材料 大月「小林多喜二とのつきあい」（『文化評論』77，2，大月「多喜二と私」『画家大月源二の世界』）

ちなみに，大月は美校に入るのに1年浪人した。

久保栄は，1900年，札幌生まれ，1903年に東京へ行き，芝区に住む。1906年にまた札幌に戻る。そして再び東京へゆく，その後，府立一中から，一高へ進み，村山知義と同僚になる，東京帝大でドイツ文学を選ぶ。卒業して，築地劇場に入団。小山内薫や土方与志に学ぶ。その後，新築地劇団に属し，退団する。1930年4月，日本プロレタリア劇場同盟に加盟する。

村山かず子は多喜二と親しく，その夫・知義と久保は親しいから，久保は多喜二と出会ったかもしれない。

村山篝子（かずこ）の息子・村山亜土が『母と歩く時』（JULA 出版局、2001年）で、多喜二の思い出を含めて書いている。

彼にとって、多喜二はまことに忘れがたい人であった。多喜二は、痩せて小柄、色白で頬が赤く、むしろ女性的な感じであった。夏の日、村山家での作家同盟の会議に、多喜二は浴衣にカンカン帽という姿で、肩を振り振り。下駄音高くあらわれた。そして亜土を見つけると、「ケケケ」と笑い声をたてながらすばやくつかまえて、アグラの中に抱きこんで、誰よりも盛んに発言し、時々「異義なし！」などと叫んだりした。頭の上のあのキンキンと甲高い声は、亜土の耳になまなましく残っており、突き出した喉仏のコリコリと動く、くすぐったいような感触を、亜土の後頭部がはっきりおぼえている。

（11 ページ）

新宿の中村屋の隣に近江屋という小さな食料品店があった。篝子は、その店に寄り、次に、その真裏にある薄暗いコーヒー店がある。篝子は、その店に入る。するとさっき近江屋の店の奥にすわっていた若い男が、人目をばかのようにひょいとあらわれ、篝子に手紙のようなものを渡して、たちまちいなくなった。息子・亜土は、母が何か秘密の連絡係のようなことをしていたらしい、とみる。

篝子は、実に筆まめであった。獄中の小林多喜二や中野重治のような作家たちへは、封緘葉書に細かい字でギッシリ書いた。（12 頁）

なお、1932 年のシゲティの音楽会の切符を多喜二に送ったのは、誰か分からないが、もしかしたら村山篝子ではないかとも思える。拙書では、宮本百合子と書いたが。篝子はクラシック音楽がとても好きである。

昭和 8 年 2 月、豊多摩刑務所に村山知義が入獄しており、妻・篝子と息子・亜土が面会に行った。この時、篝子はハンドバッグに白墨で「タキジ コロサレタ」とかいて知らせた。（10 ページ）

篝子は、断髪、洋装であり、当時のモガ（モダン・ガール）だった。

昭和8年2月、いつも明るい笑顔であられる原（泉、女優、中野重治夫人）さんが、その日に限って、庭から（村山篝子の家に）目を吊り上げてとびこんで来てきて、半泣きのような声で篝子に、「あたし、先に行ってるからね」と、言い捨てて駈け去った。篝子は声も出ずに立ちすくみ、血相をかえ、洋服ダンスをあけたりしめたりして、身支度もそこそこに出て行った。その前日、昨夏・小林多喜二が殺され、高円寺の自宅に運ばれたのであった。（112ページ）

岡田嘉子と杉本良吉

杉本良吉（1907・2・9－1939・10・30）は、党内フラクションで多喜二と一緒に活動した。杉本は。本名 吉田良正、東京生まれで、一中卒、1924年に北大予科に入るが、中退し、1925年に早大露文科に入るが、中退する。クリスチャンだった。1927年からプロレタリア演劇の演出家になる。クリスチャンの杉山智恵子と結婚する。1935年、新協劇団に入る。1938年1月3日、女優岡田嘉子と樺太国境を越える。ソ連で銃殺される。

岡田嘉子（1902－1992）は、広島生まれ、大正から昭和にかけてサイレント映画時代のトップ女優。父がリベラリストで、1917年、父が小樽の「北門新報」の主筆に招かれ、嘉子も、女子美西洋画科を卒業して、1918年に小樽に来て、婦人記者として入社する。同年、慈善演芸会でヒロインを演じ、際立った美貌で評判になる。1919年、父に連れられて上京し、演劇の道に入る。1918から19年に小樽で生活した。だから多喜二は彼女の小樽時代の評判を聞いたかもしれない。

今村恒夫は、1936年12月9日、26才で死去した。

乗富道夫について、西脇対名夫が新しい側面から調べをしている。

伊藤千代子

多喜二と知り合ったとは思えないが、東栄蔵『伊藤千代子の死』未来社、藤森明『こころざしいまに生きて 伊藤千代子の生涯とその時代』学習の友社、藤田廣登『時代の証言者——伊藤千代子』学習の友社、の研究がある。

吉田隆子（1901-1956）は、小林多喜二追悼を特集した歌曲集「前哨の歌」第一集から第四集を1933年に発表した。佐野隼夫作詞「小林多喜二追悼の歌」が入っている。ちなみに、久保栄と同棲した。

園井恵子は、本名は 袴田トミ、1913年生まれ、岩手出身で、小学校高等科にいた。盛岡から、祖母、伯父のいた小樽へ、一家で移住した。x x たすけ、の元へであった。入船町のお菓子屋だった。園井は、庁立小樽高女に入る。小樽に築地小劇場が来て、園井はそれを見た。これは、多喜二らが呼んだものだった。園井は、新劇(*)をやりたかった。だが小樽から宝塚へ行った。経済的に新劇はやれないからだった。昭和4年6月まで小樽にいた。高女2年生までである。宝塚へ行ったが、試験日に間に合わなかった。受験させてと、3日、学校の前でストをした。通りかかった小林一三に入れてもらう。「そんな熱心な子なら」と。昭和4年に入った。月給10円で、7円を母に送った。1930年初舞台。昭和10年に宝塚の大スターになる。宝塚にそれまでいないタイプだった。母を宝塚へ呼ぶ。小林一三が、宝塚映画を作る。園井のためだった。園井は、主役をやる。やめて、新劇に。丸山定夫を師とする。丸山の劇団で客演した。東宝映画「無法松の一生」（稲垣浩監督、昭和18年）のヒロイン、となる。坂東妻三郎と共演した。坊や役は、長門裕之。戦後、この映画はアメリカ軍に一部カットされた。その後、丸山と園井が劇=芝居「無法松の一生」を演じた。新劇は解散し、戦争で大政翼賛会に入った。班ができて、北海道は滝沢修。広島中心で中国地方を、丸山が廻った。桜隊という名であった。広島は三発の焼い弾が落ちただけ、変だと考えられた。園井は、東京へ稲垣監督を訪れ、映画に出してもらおうとするが、不運にも会えず。広島へ

行った。8月6日、彼女の誕生日。その日のために赤飯をつくろうとして、後援者を訪れ、小豆ともち米をもらう。そして広島に戻り、誕生日に赤飯を作って2階に上がる瞬間、原爆にあう。丸山も広島で原爆死した。園井は、同じ場所で倒れた薄田研二ジュニアを介護する。彼は死ぬ。園井は、「小樽へ帰ろう」と母に手紙を書く。だが原爆症で、ほどなく死ぬ。1945年だった。(主に、井上ひさし講演による)

(*) 新劇。19世紀末、演劇を新しく革新する運動。例、モスクワ芸術座、ダブリン市民劇場、ベルリン自由劇場、フランスで盛んとなった。20年遅れて、小山内薫が日本へ。導入した。

岩松 惇(あつし)、ペンネーム 淳(じゅん)、その後、八島太郎。

宇佐見承『さよなら日本』(晶文社)で、プロレタリア絵画・漫画家の岩松の伝記が書かれた。

岩松は1908年9月2日、鹿児島生まれ、根占(ねじめ)郷土の家系。父は、親愛といい、医者になった、自由民権の流れを汲んだ。芸術を愛した。東京で学ぶ。惇は末子で、厳しいしつけをうけたが、自由に育つ。子供時代に成績が優秀だった。鹿児島二中へ行く。自由な学校だった。惇は明るい。教練教師だけを嫌う。2年からなまけ、文学を読む、サッカーをする。絵に熱中する。幼いとき母を亡くす。絵描きになる決意をし、中学4年で、父に語る。父は赦す。鹿児島市内の谷口午二の指導を受ける。絵が「鹿児島新聞」「文章世界」に載る。美校西洋画科に入れた。昭和2年上京する。しかし除名される。

プロレタリア画科新井光子と結婚する。

笹子智江(新井光子)は、東京生まれ、ミッションスクール神戸女学院を出て、大正15、文化学院美術部に入学し、そこで学んでいた。特異な人だった。父は技師長で、一高から大阪高工を出た。洗礼を受けた。出世を望まないが、出世した。父が娘に絵描きにならないかと誘った。後に新井光子と名のつた。

そして岩松と結婚する。光（智江）はそのころ、小林多喜二のハウスキーパー伊藤ふじ子とつきあっていた。（ただしふじ子は、ここでの表現されているハウスキーパーではない）、ふじ子は洋裁のできる水島みつ子を講師にしたてて。大井町界隈の労働者街に洋裁学院まがいのものをつくり、そこを根城にサークル運動をはじめており、光（智江）もその仲間にくわっていたのである。そうして行動は当然、危険をともなっていた。（宇佐見承『さよなら日本』晶文社 1981, 131 ページ。）

昭和八年の二月二十一日深夜、はげしく戸をたたく音に太郎（岩松）はおこされた、連絡に来た男は「小林多喜二が築地署で惨殺された！」とさげんだ。タクシーをとばして岡本唐貴をさそい、杉並区馬橋の多喜二の家にかけてつけた。

プロレタリア作家同盟中央委員長だった江口渙など十数人があつまって通夜がおこなわれていた。小林の顔は傷だらけで、肋骨が折れていた。母は息子の傷をなでながら、よよと泣き、あつまった面々は、いつ警官が検束に来るかもしれぬというのでソワソワしていた。千田是也にうながされ、岡本は油で、太郎（岩松）は鉛筆で、いそぎデスマスクを書き、通夜は早々に解散した。太郎（岩松）は裏口から畑づたいに逃げた。（同、130-1 ページ。）

3 蔵原是人の場合

多喜二は、「防雪林」を4月26日に書き終えた後、上京した。蔵原と初めて東京で会った。ところがしばらくして、それから4カ月ほどしてから突然「三月一五日」を送ってきた。それを読んでみると、それは今迄の日本のプロレタリア文学になかった注目すべき作品だと思ったので、それを推奨して『戦旗』に載せた。載せる前に立野信之や林房雄も読んだし、山田清三郎も編集長だったから読んだはずです。みんなで相談して、長いけれども載せることにしたが、そのままただの発禁どころではなくて、編集者がひっかかる

だろうということで、だいぶ伏字にした。それからもう一つ、最後に何枚かついてた。現在の「三月一五日」のテキストの終わりの方に更に何枚かあって、そこで3月15日の後における小樽のメーデーを書いている。それは非常に勇ましく書いてあるが、何だかとってつけたようで、このままでは最後がかえって弱くなるから、これは切ったらいいだろうと、立野たちとも相談して切った。今の本文は「共産党万歳！」云々という落書きで終わっている、ああいう形にした。（「一九二八年三月十五日について」『多喜二と百合子』NO.6）昭和29年10月、26ページ。）

その原稿を蔵原は大切に保存しておいたが、戦争中、他所に預けだが、そこで焼かれた。多喜二は削除されたことに不満を持っていた。

『蟹工船』でも後記があり、再び立ち上がる場所を書かないと気がすまないようなものが、当時のプロレタリア文学の一つの雰囲気でもあった。多喜二は、それを書いた。

『読売新聞』昭和4年1月5日の、新人紹介欄に多喜二は自分の筆で書いている。そこには、橋本英吉、平林初之輔、上野壮夫、新井紀一、大熊信行、勝本清一郎、佐々木孝丸、里村欣三、神近市子などから激励を受け恐縮した、と書いた。（同、27ページ）

『三・一五』には、ある巡査の人間的弱味の面が書かれていたが、これが削られた。蔵原は、削ったのは林房雄か誰かだと言う。（同、33ページ）

蔵原は1932年4月に逮捕され、警察に4カ月いれられ、未決で2か年いた。未決の監房にいる時、2月23日に「小林せき」という人から花がとどいた。蔵原は、多喜二の母の名がセキだとは知らなかった。数日たって蔵原の母が面会にきた。彼女は何とかして多喜二が殺されたことを、蔵原に伝えたかった。彼が「この間、小林せきという人が花を差入れてくれたんだが・・・」というと、母が「多喜二さんがなくなったんでね」といった。すると「そんなことをいってはいかん、面会を禁止する」と、その時の看守が非常に怒りつけた。それで蔵原は多喜二が死んだことを知った。

多喜二が殺されてしまって、しばらくの間は拷問を緩めた。

小林以前に蔵原もひどい拷問を受けていた。この時に蔵原が死んでいたら、あるいは多喜二は殺されなかったかもしれないと蔵原は考えた。

多喜二は捕まって拷問されても頑として運動を裏切らなかった。

4 井上ひさし講演から（1997年2月14日 商大および市民大学）

井上ひさしは、山形県の米沢出身で、米沢は、米の単作地帯である。小さい時、父を亡くした。米沢で、母が、大熊信行の塾生だった。父が、共青で、劇団をやり、小作争議に参加した。五色温泉第3回日本共産党大会の下準備をした人は、米沢に多い。井上の父は、多喜二と同じく、『戦旗』に書いた。謄写印刷の話だそうである。

大熊信行は、かつて小樽高商の教師で、かつ米沢の出身であった。大熊の思い出は、こうだ。「小樽はいい。勤務が終って地獄坂をおりてくる時、いい気持ちだった。あそこはいい所だった。」子供だった井上は、大熊の膝の上ののかった。大熊は美男子だった。井上は小学校の時、x x = 伏せ字で、多喜二を読んだ。父親のせいであって、それらは家の2階にあった。『蟹工船』などである。x x の多い作家だな、と井上は感じた。

多喜二、豊多摩刑務所（その後の、中野刑務所）

昭和7年4月下旬に地下にもぐる。麻布の東町。

昭和7年実施、7月東京都1万人警官分宿計画があった。

9月10日 麻布 山中屋、果物屋 2階パーラーで、2階をパーラーにするのは流行っていた。多喜二が4人と会う。

新宿紀ノ国屋は、薪や炭の燃料屋だった。田辺茂一が、1927年1月から本屋を始める。彼は1926年慶応高等部を卒業した。（『ある歓喜の歌』）。よく売れる本は、そこでは売れない。そこでプロレタリアものを売る。左翼の本、雑誌が置かれた。2階で多喜二は講演した。本屋で左翼の人が会議した。

多喜二は、9月中旬 麻布十番近くに住む。9月下旬 麻布桜田町へ移る。この10日ほどわからない。

スパイ M, 多喜二(*)と河上のアドを警察に知らせない。

多喜二は、プロレタリア作家の中で文章がちょっと違う。『党生活者』は『暗夜行路』の文章と似ている。

多喜二の闘いは何か 天皇大権は困る 国の形も修正したい

(*) この指摘は不正確。

5 多喜二奪還

伊勢崎・多喜二祭実行委員会（伊勢崎市八幡町 44）は、『伊勢崎署占拠・多喜二奪還事件資料集』、『「多喜二奪還事件」の文学的前提』、『「多喜二奪還事件」の記録——伝説から史実へ』を出版した。

1930年9月6日 群馬県伊勢崎町で行われた文芸講演会にナツプが講師を派遣した。小林多喜二、村山知義、中野重治が行った。官憲は事前に検束してしまった。民衆が伊勢崎署を包囲し、抗議、占拠、乱闘の末、両者の交渉が持たれ、検束者全員の釈放が実現し、しかも抗議団に逮捕者はでなかった。

6 滝子との関係

多喜二はヤマキ屋で sleep スリープしたと日記に書いた。スリープとは、もちろん半売春先だから、眠たわけではなく、寝たのである。伝記を書いている時には、相手は誰だろうと考えなかったが。この相手は滝子であろう。心理的にはそれ以外考えられない。そこで、滝子とはその後身体の上でも親しい関係になったと思える。私の『小林多喜二』では、中津川俊六（武田邁）の「多喜二の恋い」を採用したのだが、彼は多喜二を理想化したのではないか。三吾さんは、私への話で、滝さんがきてから、家に二階を作った、と言うから、多喜二と滝子は二階で寝たのだらう。

滝子は 2009年6月19日没した。

7 その他

澤田章子講演。多喜二の人道主義は母譲り，と。

1929年学連が解体して，共青に編入された。

1920年代後半にロシア革命とレーニンを相対化することは至難の業であった。（『ある歡喜の歌』34頁。）

多喜二の仙台行きについて。田中清玄の自伝で，多喜二が学連の会議で仙台に来たとあり，私の伝記では。疑わしいと書いたが，田中がそう書いているので尊重すべきだと思う。そうなると，多喜二は小樽の拓銀から休暇をとってやってきたことになる。非常に熱心だったことになる。

多喜二と小説での人物の命名

小林多喜二はその小説で身近な人を登場人物にあげている。

「3・15」で，幸子，これは彼の妹である。

「党生活者」では，笠原，これは彼の銀行員時代に好きだった女子銀行員の姓である。

伊藤は，伊藤ふじ子の姓である。本人・主人公の佐々木は，同じく彼の銀行員時代に好きだった女子銀行員の姓である。

「安子」は，もと「新女性気質」が改題されたものだが，安子は，小樽のカレー屋の名である。

「同志「田口」の感傷」の田口は，恋人田口瀧の姓である。

「東俱知安行」で，衆議院候補になったのは山本兼蔵だが，小説では嶋田正策とし，そっくり彼の親友の名である。断り無く使った。

「滝子其の他」の滝子は，そっくり滝子，である。

「同志「田口」の感傷」の話は，姉によると，ニシン場でのアルバイトをそれほど恥ずかしいと思わなかった。だからその感情は多喜二の創作である。

新発見の小説「老いた体育教師」

曾根博義先生が、小林多喜二の小説を新しく発見した。「老いた体育教師」である。この経緯は、『さん 舟へんに山 板』（さんぱん）第 III 期 第 13 号、2007 年 3 月、EDI 発行、所載の曾根論文「雑誌『小説倶楽部』と小林多喜二」で紹介された。

全文は、日本大学国文学会『語文』127 輯に曾根先生の解説と共に発表された。

『蟹工船』には、終わりに「付記」がある。当時、「付記」をつけるのが流行った。その趣味は余りよくないが、その付記の最終行に、こうある。

——この一篇は、「殖民地に於ける資本主義侵入史」の一頁である。

だから小林多喜二は、北海道を殖民地と見ていたのである。もちろんそれは古典的帝国主義の植民地ではなくで、普通の意味の殖民地（大量の人々が移住してきた土地）という意味であろう。

1930 年に小林多喜二が拓銀を解職された時の辞令が、11/3～ 市立小樽文学館で初公開される。10/28 付『読売新聞』夕刊、10/30 付『朝日新聞』朝刊などで報道され。

○内容は、役職氏名＝小樽支店書記/小林多喜二

/発令年月日＝昭和四年十一月一六日/発令

/辞令文＝依願解職（諭旨）

/事由/左傾思想ヲ抱キ「蟹工船」「一九二八年三月一五日」「不在地主」等ノ文芸書

刊行書中当行名明示等言語道断ノ所為アリシニ因ル

/退職手当金算出額＝一、一二四円一四銭ナルモ半額ノ五六〇円給与

/欄外一書籍発行銀行攻撃

小松勇一郎も三船に売られた。（『ある歓喜の歌』）

千田是也が「三・一五」をドイツ語に翻訳した。

阿部次郎『三太郎の日記』の多喜二書き込み本など、11月3日から市立小樽文学館で公開される予定。

1944年、中央公論事件が起こされた。横浜事件で『中央公論』編集者たちが弾圧された。共産党壊滅後、仕事が無くなった特高がでて上げた事件。

多喜二の個人蔵書93点、家族の蔵書が、商大に寄贈され、目録が平成20年に作られた。

多喜二の小説『スキー』（『国民新聞』1921年10月30日が発見された。

多喜二は二九才で絶命したが、いつも思うのは、若いのに随分大きな仕事をしたのだな、ということである。人の二倍を生きたのだ。

日本が少しでも民主的な社会になることを多喜二は望んでいるだろうが、昨今は、難しい政治状況となっている。

9 ブームと学会

2008年は、『蟹工船』ブームとなった（『北海道新聞』2008年5月7日）。半年で五〇万部ほど文庫版売れたそうであり、各書店のトップ・テンの一つになっていたものである。しかし、この本は、毎年7000冊売れていたものであり、それだけでも大した物である。

このブームの遠因はグローバル資本主義の進展である。

小林多喜二研究は、近年、白樺文学館（我孫子）が、東京に多喜二ライブラリーを作り、そこを中心に種々の企画がなされた。その後、多喜二ライブラリーは、我孫子に収容された。

まず、2003年に東京で研究シンポジウムがおこなわれ、2004年に同じく東京で国際シンポジウムが開かれた。

2006年に中国・河北省保定の河北大学で国際研究集会在がされ、白樺文学館

の記事によればこうである。

中国・河北大学主催「小林多喜二国際シンポジウム」11/12-13 開催へ。白樺文学館多喜二ライブラリー主催の2度の「小林多喜二国際シンポジウム」。中国・河北大学張如意教授を中心に、中国の多喜二研究者が集まり、2006年11月12、13の両日、河北省・保定市の河北大学で開催される。日本、アメリカ、韓国の4ヶ国の研究者が一堂に集まり、近年の研究成果を交流するもので、日本からは報告者10名を含む約30名が参加する。事実上の第3回国際シンポとなる。

2008年にイギリスのオックスフォード大学で国際研究学会が開催された。

白樺文学館は、以上に加えて、漫画『蟹工船』を出した。また、『蟹工船』の読後論を募り、懸賞を出し、『『蟹工船』をいかに読んだか』の本を出した。こうして佐野力さん（白樺文学館）の力で、4回の研究集会が持たれた。

2012年に小樽商科大学で国際研究会が開かれた。

世界各国で多喜二の翻訳が進んでいる。例えば、イタリアで「蟹工船」、サーリスが翻訳、出版、2010?。フランスで、「蟹工船」オドリ訳。ノルウエー訳「蟹工船」2010。スペイン語「蟹工船」。韓国語訳「蟹工船」2008、梁喜辰 訳。1987、イ・グイウオン訳、すぐ絶版になったと。なお、著作集が計画中。アメリカで翻訳中。中国で、漫画「蟹工船」が翻訳された。秦剛 訳、北京・人民文学出版社 2009年。

文献その他

その後の新しい多喜二研究文献を掲げておきたい。

- くらせ みきお『小林多喜二を売った男』白順社 2004年
畑中康男『小林多喜二 破綻の文学』彩流社 2004年
曾根博義 編『小林多喜二 老いた体操教師』講談社文芸文庫
ノーマ・フィールド『小林多喜二』岩波新書

- 井上ひさし『組曲 虐殺』集英社 2009年
 浜林正夫『小林多喜二とその時代——極める眼』東銀座出版社 2004
 浜林正夫『蟹工船の社会史』学習の友社 2009年
 荻野富士夫編『小林多喜二の手紙』岩波文庫 2009年
 井本三夫『蟹工船から見た日本近代史』新日本出版社 2010年
 川西政明『新・日本文壇史』第4巻 岩波書店 2010年
 小林セキ『母の語る 小林多喜二』新日本出版社 2011年
 高田光子『小林多喜二 青春の記録』八朔社 2011年
 井本三夫「蟹工船から見た日本近代史」新日本出版
 神村和美『多喜二<全作品>ガイドブック』さくむら書房

津上忠，戯曲『早春の賦—小林多喜二』，新人会で芝居で，初演が，主演・山本学，再演，再々演され，4演目は，主演・米倉斉加年。

なお，米倉斉加年の指導で，小林多喜二についての劇があった。

「蟹工船」

- 舞台 新築地劇団 1930「北緯五十度以北」のタイトル
 東京芸術座 1963 村山知義・演出，脚本・大垣肇，1983 再演。
 はぐるま座 1987
 劇団俳優座 2009
 東京芸術座 2010
 映画 「蟹工船」1953年 主演・監督 山村 聡，現代プロダクション

- 太田努『小林多喜二の文学と運動』光陽出版社
 SABU 監督，映画「蟹工船」，松田龍平主演。
 小林多喜二草稿ノート CD-ROM 版 雄松堂
 貴司山治全日記 CD-ROM 版
 荻野富士夫編『多喜二の文学，世界へ』小樽商科大学出版会 2013年

『いま中国によみがえる小林多喜二の運学，中国小林多喜二国際シンポジウム
論文集』 東銀座出版社 2006

高橋純「ユマニテ紙の小林多喜二追悼記事」(『言語センター広報』17号，2009
年1月)

島村輝，多喜二研究展望＝『日本近代文学』第72集「展望」に「時代と文学
への新たな眼差し」

高橋秀晴 10月/7付『秋田魁新報』の「文学空間あきたー本県近代作家の故
郷観」で多喜二を5回にわたり紹介する。

清水節治『読んで、行きたい名作のふるさと』は，光村出版社『現代国語』
の教科書で紹介された，小林多喜二「蟹工船」をとりあげている。

伊豆利彦著『戦争と文学ーいま小林多喜二を読む』多喜二ライブラリー刊行
図書，白樺文学館

陳君の論文(『人文研究』)

画家・藤生ゴオ 小林多喜二原作「蟹工船」のマンガ，2005年2月

中国で，漫画「蟹工船」が翻訳された。秦剛 訳，北京・人民文学出版社
2009年

Kei Sugar 歌 CD『多喜二レクイエム』が大好評!!3000枚完売目前!!

映画『小林多喜二』監督は今井正。

記録映画『時代(とき)を撃て・多喜二』池田博穂監督・脚本

テレビ放映『ヒューマン・ドキュメント いのちの記憶 —— 小林多喜二・
二十九年の人生』HBCテレビ製作，2008年5月31日放送，11月17日再放送。